

retrace a pair

一対をなぞる

薬師川 千晴

Gallery P A R C
GRAND MARBLE

2011年に京都精華大学洋画コースを卒業、2013年に同大学大学院芸術研究科博士前期課程芸術専攻を修了した薬師川千晴(やくしがわ・ちはる/1989年・滋賀県生まれ)は、これまで油絵具やテンペラ絵具を素材に用い、おもにデカルコマニー(※紙に絵具を載せ、その上に別の紙を押し充て、ひきはがすことで対称の模様や像を生じさせる)技法を使用した、独特の絵画作品を発表してきました。これによって得られる対称の像を2枚の紙片に分ち、画面上で構成する作品《**絵画碑**》や、絵具を挟んだ紙を引きはがす際に見られる「絵具が引き合う力」に着目した作品《**絵具の引力**》など、薬師川のこれまでの作品は、もともと1つであったものが2つに分かれた存在＝「一対」の関係を主題に含んできたといえます。

今回初出品となる2つの新作は、この「一対」という関係への思考を進めたものですが、ここでは「対」という関係への眼差しに変化が見られます。

人が祈るときに両手を合わせる仕草から着想を得た新作《**右手と左手のドロージング**》は、薬師川の右手と左手によって、異なる2色の絵具を紙上で同時に混じり合わせた作品です。左右の手の軌跡は絵具のストロークとして交じり合い、画面上にひとつのイメージを残していますが、細部に目をやると、顔料を混ぜた別々の色(絵具)は混色されて新たな色になることなく、ぶつかり合い、重なりあいながら、それぞれの個を保っています。

同じく新作となる《**好一対の絵**》は、一方の画面に描いた色やストロークを見て、そこに発生した色やストロークへの欲求をもう片方の画面に描く。そして、その影響をうけてまた最初の画面に加筆する、といった関係性をプロセスに持ち、2つの画面は互いに影響を及ぼしあいながら同時に完成してゆきます。

これまでの作品が、かつてひとつの物質(絵具)であったものが、分かれたことで「対」という関係を与えられ、また、デカルコマニーや絵具の引き合いなどの現象と行為の狭間に生じた偶然性を起点に、その後に薬師川が介在してゆく制作過程によって「一対」への思考が進められていたのに対し、新作《**右手と左手のドロージング**》では、薬師川の身体性を起点に、ひとつを成しながらも決して混じり合うことのない「対」の関係が、《**好一対の絵**》ではふたつの画面が薬師川の感性をまるで反射板として、非対称でありながらも「対」という「ひとつ」の関係に置かれているといえます。

本展では、薬師川の新たな「一対」の思考や「描く」への取り組みを感じさせる新作とともに、《**絵画碑**》《**絵具の引力**》などの未発表作品もあわせて出品することで、「一対」から生じる世界のあり方や可能性についても思考をめぐらせる機会となるのではないのでしょうか。

薬師川 千晴

Chiharu Yakushigawa

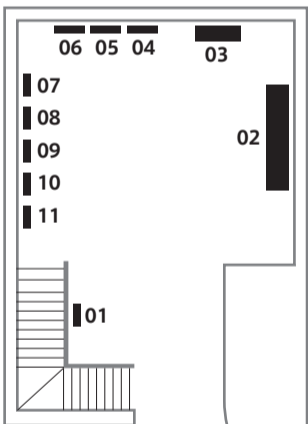
1989年滋賀県生まれ。2011年、京都精華大学 芸術学部 造形学科 洋画コース卒業。2013年、京都精華大学 大学院芸術研究科博士前期課程 芸術専攻卒業

2016年・個展「絵画へ捧げる引力」(Gallery PARC / 京都)、2015年・個展「絵画碑」(Gallery PARC)のほか、グループ展に「ハイパー・トニック・エイジ」(2015年・京都芸術センター)、「Kyoto Current 2014」(2014年・京都市美術館)、「科学のあとに詩をかくこと」(2013年・ギャラリー16 / 京都)、「主張展」(2012年・ギャラリーアーティストロング / 京都)、「懐」(2012年・常懐荘 旧竹内邸 / 愛知)、「視域」(2012年・京都精華大学 7-23ギャラリー / 京都)、「Leave Color -視覚と知覚-」(2011年・ギャラリーフール / 京都)、「京展」(2010年・京都市美術館※芝田記念賞受賞)など。

展示作品

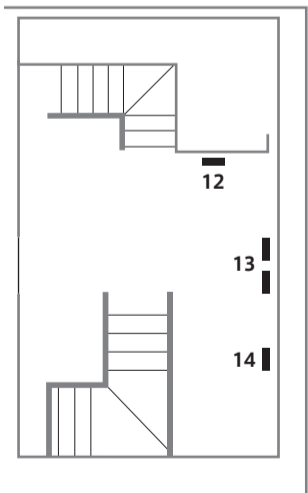
2階

- 01 右手と左手のドロージング 青**
2017 272×394mm 顔料、練り込みテンペラ、ケント紙
- 02 二対の絵画碑 #6 黄**
2018 1120×1450mm 土、顔料、練り込みテンペラ、ケント紙、奉書紙
- 03 二対の絵画碑 #5 青**
2017 580×720mm 土、顔料、練り込みテンペラ、ケント紙、奉書紙
- 04 引力の為のドロージング**
06 2017 272×394mm 鉛筆、ケント紙
- 07 絵具の引力**
11 2017 油絵具、ケント紙



3階

- 12 番 #4**
2017 265×198mm 顔料、練り込みテンペラ、ケント紙
- 13 好一対の絵 #7**
2018 318×380mm 油絵具、ユニペーパー、アルミ板
- 14 5:5 赤**
2017 440×290mm 油絵具、ユニペーパー、ケント紙

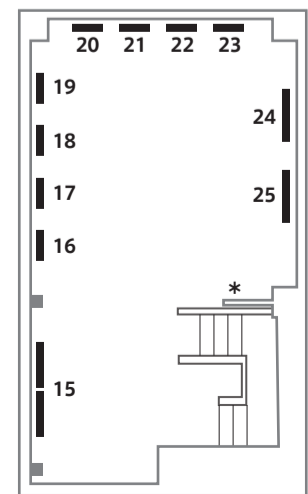


4階

- 15 好一対の絵 #8**
2018 845×545mm 油絵具、ユニペーパー、アルミ板
- 16 右手と左手のドロージング #01~ #08**
23 2018 272×394mm 顔料、練り込みテンペラ、ケント紙
- 24 右手と左手のドロージング #09**
2018 394×545mm 顔料、練り込みテンペラ、ケント紙
- 25 右手と左手のドロージング #10**
2018 394×545mm 顔料、練り込みテンペラ、ケント紙

* 作家ステートメント、各作品解説

ご自由にお取りください。



retrace a pair

一対をなぞる

薬師川 千晴

紙に一つの点を描いてみる。そしてその隣にもう一つの点を描く。

すると二つの点には色の濃さや大きさの差異が生まれ、

同時に2つの点の間にある空間は、お互いへの距離となる。

私はこの、点と点、個と個、あちらとこちらから成る一対の関係性に魅力を感じている。

天と地、自己と他者、有と無、二極があることで対の関係は成り立ち、

そしてそれは互いに必要とし合い、求め合うのだろう。

2階展示作品

絵画碑

現代の技術は目的達成のための時間の短縮化(より正確に、より合理的に)に努めている。

そんな今日だからこそ、私は絵画に時間を託したいと思う。

その手段として土を絵具に用いてみる。土は、かつて何かであったものの集積であり、

この地の歴史の体現者であり、時間(過去)そのものである。

土を描画材に用いる事で、私は絵に土の時間を直接刻印してゆく。

そうして出来た絵を、私は絵画碑と名付けた。

2階展示作品

絵具の引力

あらゆるものから質量が失われつつあるこの世界で、今、絵画を通して、

質量ある物質特有の引力という力について考えてみる。

そもそも引力とは空間的に相まった物質が互いに引き合う力の事である。どんな物質も質量さえあれば、

互いに力を伝え合い、引き合う力を元来そなえている。

では、絵画においての引力とは何だろう。

当たり前のことかもしれないが、絵画とは絵具と絵具が引き合い、

隣同士の色とが交わる連鎖により成り立っている。

この意味において、絵画とは絵具と絵具の引力によって成り立っているといえるのではないだろうか。

その絵具の引力をより純粋に引き出すために、描画技法としてデカルコマニー技法を用いる。

デカルコマニーとは、フランス語で写し絵・転写画を意味し、紙に絵具を塗りつけ、

それを二つ折りにしたり別の紙に押し付けることで、塗りつけられた絵具を転写し、

左右対称の図を描く絵画技法のことである。この技法を用いることにより、重ね合わされた絵具、

つまり、1度1つの塊となった絵具を引き剥がし、2つに分かれさせることで、

絵具の持つ互いに引き合う力を絵画により強く生じさせることが出来るのではないだろうか。

3階展示作品

5：5

上記の絵具の引力のシリーズを、よりシンプルにしてみたのが5：5のシリーズである。

二枚の紙に左右異なる色をのせ、デカルコマニー同様、その二枚を一つに重ね合わせ、ひらく。

すると、絵具の粘度や色により、勝つ色と負ける色が出来る。

絵具が完全に5:5になることはなく、どちらかがどちらかに覆いかぶされ、残る画面は片方の色に染められる。

世界には、有と無、善と悪などといった二極が存在する。

それは常に双方が互いに対峙し合っており、

そして、その二極の“間”にこそ生身の現実があるのだらうと思う。

4階展示作品

右手と左手のドロージング

右手と左手に異なる色を付け、紙の上で手を合わせてみる。

すると2色の絵具は交わり、互いの顔料の色の粒子へと入り込んでゆく。

今まで私は1つになったものを2つに分かつ事で互いの関係性を考察してきたが、

この右手と左手のドロージングでは、個と個が交わるその軌跡をシンプルに1枚の紙の上で行ってみようと思う。

4階展示作品

好一対の絵

絵画を通して、物質の持つ時間や引力について考察してきたが、

気が付けばいつの間にか“絵を描く”ということから距離が出来てしまったように思う。

今、ここで“絵を描く”ことに立ち返り、絵具を“色”として描いてみよう。

まず1枚の絵を描く、その隣でもう1枚の絵を描く、片方を見ながら隣に何色を置くか考え、

どんな線を引くか考える。そしてまた1枚目の絵に加筆し、また隣へ戻り、2枚の絵は同時に完成してゆく。

そうして出来た絵は互いに影響し合い、片方ともう片割れという関係性が生じる。この互いの関係性は、

今までの互いの関係性とは異なり、互いに交わることはなく、

個が個として自立している中で、ただ、隣り合う、ペアの作品である。

色の気配を感じながら、絵を描く、使いたい色をそこに置き、描きたい線を描く。

当たりの事を言っているかもしれないが、

私はようやく絵画のスタートラインに立てたようで、とてもわくわくしている。

私は人が祈る時に合わせる手に魅力を感じる。

そもそも、人はなぜ祈る際、手を合わせるのだろうか。

思うに、手を合わせる事により、

何も持たなくなる、

事が重要なのではないだろうか。

それはつまり、何かを抱える手段である手を天へ差し出し、

物質世界とは離れた位置から“祈り、”という非物質的な行為へと移行する、ある種の儀式のようなものなのだろう。

そして、ひとつに合わさった手をひらくと、そこには右手と左手が現れる。

つなぎ合う力を“両者、”に分かれさせることで、ものともとの“間”が生まれ、

一対の“互い”の関係が成立する。

点と点は一対であることで互いに干渉し合い、触れ合う事ができる。

私はこの絵画を通して考えた一対の軌跡を作品に託そうと思う。